
死神の契約

セセラギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の契約

【コード】

N0518Q

【作者名】

セセラギ

【あらすじ】

若くして今までの人生、そして自分の未来に絶望していた主人公^ゆ悠斗の前に、死神と名乗る美少女が現れた。

美少女は半信半疑の悠斗にある契約を持ちかけ、悠斗は冗談半分で承諾してしまう。

その瞬間、悠斗の人生は大きく変わってしまった。

死神現る（前書き）

この小説は携帯小説です。

死神現る

同じ毎日の繰り返し。

現在一人暮らし中。

両親は幼いころに亡くなり、兄弟もいない。

親戚はいるがしばらく連絡をとっていない。

スポーツもできない。

勉強もできない。

特技や趣味もなし。

ただ毎日学校に行って退屈な日々を過ごしてるだけ。

そしてそんなことより何より、最も悲しいことだが…

女の子にまったくと言っていいほどモテない。

女の子と付き合ったことはない。

もちろん童貞である。

まともにしたこともない。

まったく言っていないほど女の子と接点がない。

女の子って柔らかいのか？

いい匂いがするのか？

まあ、俺には確かめるすべもない関係のない話である。

死神現る(2)

そんなある日。

本日は日曜日。

ピンポーン

朝から家のチャイムが鳴った。

どうせ宗教勧誘かセールスだろと思い、悠斗はチャイムを無視してまた眠りにつこうとした。

ピンポンピンポンピンポーン

しかし、一向に鳴りやむことがない。

半分寝ぼけた頭のまま起き上がり玄関へと向かった。

「はいー…どちらさんですか？」

声をかけてみるが応答がない。

あれ？と思いながら恐る恐る玄関のドアをあけた。

するとそこには恐らく自分と同年ぐらいであろう女の子が立っている。

そしてただの女の子ではなく、悠斗の理想を絵に描いたような美少女であった。

少し気になる点として、全身黒の服で黒いマントのようなものも身に付けていた。

あまりの可愛さにしばらく思考が停止してしまっただが、正気を取り戻しとりあえず状況を把握してみることにした。

死神現る(3)

不自然なほどの黒一色の衣装…

なにか宗教の勧誘か？

しかしそれなら何か言ってくるはずだ。

第一、高校生くらいの女の子一人でやらせないだろう。

コスプレの衣装か…？

コスプレだとしても俺の家に来た意味はわからない。

考えてもわからないと判断し、直接聞いてみることにした。

「俺に何の用ですか…？」

恐る恐る聞いてみると一瞬の間を置いて、女の子は満面の笑みで初めて口をひらいた。

「すみません、私は死神なんですけど…あなたの命をわたしにくれませんか？もちろんタダでは言いません！」

我に帰ったばかりの悠斗であったが、あまりに予期しない発言にまた思考停止してしまった。

「今までの人生いいことありました？これからの人生いいことあると思います？ただポーツと生きてても意味ないですよ！どうせいつかは死ぬんです。今わたしに命くれるなら特典いっぱいありますよ！」

そして満面の笑みでそう言い放つその美少女をただ見つめることしかできなかった。

契約

一生懸命に彼女の言ってることを理解しようとするが、どう考えても理解できない。

そして唯一でた答えは

「宗教の勧誘ですか？」

結局これ以外の解釈は悠斗の頭では思い付かなかったわけである。

「宗教？んー…わたし自信が一応神だからなあ…」

女の子はなにやら考え込んでしまった。

「あの一…」

「まあいいわ！とりあえずわかりやすく説明したげるねっ！」

悠斗の声を遮り急に表情を明るくさせると説明しだした。

「まあ信じられないかもしれないけど私は死神です。死神の世界もシビアで、ちゃんと人間の命を奪わないといけなくて、命を奪うことが死神の仕事でもあるわけ。ここまでで質問は？」

「いや、まあいいかな…」

「よし！で続きね。私はそのへんの死神と違ってあまりむやみやたらに人間を殺したくないんだ」

「う、うん…」

理解しようとするがとても理解できる範囲を越えている。

「できることなら最後に満足して死んでいってもらいたい！」

「な、なるほど…」

女の子は一旦ここで大きく深呼吸をした。

「あなたは今までの人生幸せだった？」

「いや、どうだろう…」

「じゃあこれからの人生幸せになると思う？」

「いや、変わらなさそう…」

その答えを聞いて女の子は満面の笑みを浮かべた。

契約（2）

「そ・こ・で、相談！今までの人生で味わえなかった、そして今後も味わえないだろう幸せをいま与えてあげる！心残りのない人生にしてあげる！…その代わりわたしに命をちょうだい」

「え…あ、うん…」

「…ん？結構わかりやすい説明だと思ったんだけどダメだった？」

「うんと…どうやって命をあげればいいんだ…あとは幸せってなにをくれるんだ…」

女の子はその言葉を待っていたかのように嬉しそうな表情で勢いよく答えた。

「命は『契約』って言って、わたしの力で一週間後に安楽死するようにできるの。だからその一週間で後悔のない幸せな人生にしてあげる。で、肝心の幸せについてなんだけど…」

「う、うん…」

思わず息をのむ。

「私があなただの彼女になってあげる」

「…へっ」

予想外の答えに戸惑ってしまった。

「1週間の間、わたしがあなたの彼女になってなんでも言うこと聞いてあげる。これじゃー不服なの？」

「いや…俺の命はそれだけの価値なのかと…」

「なに言ってるの？この先、何十年生きてたとしてもこんな美少女と付き合えると思う？というか知り合う機会すらないんじゃないかなきつと」

「まあそう言われれば…」

しかし自分で自分を美少女というのはいかなものか。

「でしょでしょっ？どうする？嫌なら私は帰るけど。私とエッチしたくない？」

『エッチ』という言葉に思わずドキリとしてしまった。

「さあ決めて！契約する？どうする？」

「いやでもさすがに死ぬのはちょっと…」

女の子はとてものがっかりとした表情をし、深くため息をついた。

契約(3)

「…わたしのこと可愛いと思っ？」

「そりゃ…もちろん」

「あなたの好み？」

「…まあ…かなり…」

「ふうん…そつか。それをわかっててもダメなんだ。将来後悔しても遅いんだよ。童貞のまま60歳ぐらいになつて俺の人生なんだっただんだーってなつても後戻りはできないんだよ？一度でいいから美少女とエッチしたかつたつてなつても無理なんだよ？それでも断るの？」

いきなり怒涛のように言葉を浴びせられた。

その女の子の瞳はまるで哀れんだ者を見るかのようである。

でもたしかにそう言われれば将来後悔しそつな気もしてきた。

このまま生きてても将来はそんなに楽しいこともなく、むしろ辛いことばかりであろう。

幸せのまま安楽死させてくれるならそのほうが良いのではないのか。

「…いまちよつと心に迷いが生じたでしょ？」

ニヤリとした表情で女の子が見つめてくる。

「い、いや…そんなことは…」

「図星ね。そんなに深く考えないで本能のままに決めちゃえばいいのに！」

だんだん自分の考えがわからなくなってきた。

果たして自分はどうしたいのか…。

「さあさあ、そろそろ決断の時よ。契約する？どうする？」

「うんと…えーと…」

「さあ！さあ！」

「…わ、わかった！…よし！契約する！」

悠斗がその言葉を発した瞬間、女の子の雰囲気が変わった。

「ではこれより契約に入ります」

「えっ、なんかちょっと…いきなり真面目な感じで…」

悠斗の戸惑いに関係なく、女の子は目をとじ集中力を高めているように見える。

と、手を上にあげると手のひらが眩しい光を放ちだした。

悠斗は目がくらみ少しだけ目をそむける。

そしてもう一度女の子を見ると、その手には漫画やイラストで西洋の骸骨の格好した死神が持つてるような大鎌が握られていた。

「ではあなたの魂いただきます」

「え、ちょ…ま、まつ…」

悠斗が最後まで台詞を言う前にすぐに大鎌が振り下ろされた。

その瞬間、悠斗の意識は途絶えてしまった。

一日目

まな板を包丁があたる音が聞こえる。

夢か…あれ…昨日俺何してたっけ…

「あつ、やっと目が覚めたね！」

女の子の声が聞こえる…って、女!?

慌てて飛び起きるとたしかに台所に女の子が立っていた。

「寝惚けてる？ちょっと衝撃が強すぎたかな？」

冷静に考えてやっと思い出した。

そう言えばこの女の子は死神で俺は大鎌に切り裂かれて気を失ったんだ。

「…あれ？特に傷ついてない…？」

「ああ、あれは魂を削り取る鎌だから外傷はないわよ」

「ってか、ホントに死神だったんだね…」

「そりゃねー。冗談だと思った？まあどっちにしろもう後戻りはできないけどね」

そうか、俺はもう一週間の命になってしまったのか。

「そう言えば自己紹介してなかったよね。今日からあなたの彼女になるマナです！年齢は500歳…ああ、これは死神界だけど…人間界ではまああなたと同じくらいって考えて！」

なにかとてもテンションが高くハキハキしている。

「えーっと…悠斗です。よろしくお願い…」

「ねえねえ、なんて呼ばれたい？」

悠斗の言葉を遮りマナが質問する。

「んー…よくわからないから適当にお任せで…」

「なにそれー恋人同士の意味わかってる！？じゃあねー…ゆづくんねー！」

生まれて初めてそんなふうに呼ばれた。

かなりってか、物凄く気恥ずかしい。

「ゆづくんもうちよっと待っててね！いまご飯できるから」

マナは鼻歌を歌いながら料理を作っている。

俺の家の台所で女の子が料理してるとはにわかには信じがたい光景である。

まあ死神だけど。

一日目(2)

「お待たせー！ご飯できたよ！」

テーブルの上にはバランスよくたくさんの種類のオカズが置かれた。

「こんなに豊富な食材俺の家にあっただけ？」

「もちろん寝てる間に買ってきたよー」

「死神はお金持ってるの？」

「まあ細かいことはあまり気にしないで！」

色々ととても怖い。

とりあえず一口食べてみる。

びっくりするほど美味しい。

「どう？美味しい？」

「うん、すごい美味しい。死神は料理もできるのか…」

「まあね！ちなみにデザートがないのはわざとです。デザートはあ・
た・し」

「う、うん…」

「なんでそんな反応しかできないの！もっと肉食系になれ！」

昨日まで女の子とまったく接点なかっただけにどうすればいいのか正直よくわからない。

「食べたらどっか行く？なんかしたいことあるなら遠慮なく言わないと。あと一週間の命なんだよ？」

いまいち実感はわかないが言われるたびにあと一週間しか生きられないんだと微妙に悲しくなってくる。

「うーん…いろいろなところ行って…買い物したり…デートしてみたいな」

「おお！初めて自己主張した！わかったよ！ちょっとこの黒い死神装束だと怪しい人だから着替えてくる！」

そう言うとマナはどこか外へと向かった。

と、またすぐに戻ってきた。

「じゃじゃーん！見て見て！可愛いでしょ！？」

見ると先ほどとは違ってかわってファッション雑誌で見るとようなオシャレっぽい今風の服装に変わっている。

「ちなみにスカートとニーソは私のこだわりです」

間近で見るニーンはとても良いなと思った。

一日目(3)

急いで支度を済ませ二人揃って外へと出た。

人生初の女の子とのデートである。

意識すると妙にドキドキしてくる。

とりあえず遊ぶ施設も併設されているショッピングモールあたりにでも行けばなんでもできるだろうと思いかうことにした。

「手繋がないの?」

マナが悠斗を軽く覗きこむような感じで聞いてきた。

「い、いやちょっと…恥ずかしい…ってか緊張するし…」

「そつ…じゃあこれならいいかな!」

と言うとマナは悠斗の腕を取ると、腕組を始めた。

「ちょっと!」

「嫌だった?」

「嫌じゃないけど…」

「ならいいじゃん」

初めての女の子の感触で、悠斗の頭の中は真っ白であった。

ショッピングモールはやはり休日だけあってそこそこ混雑している。

しかし、いつも来ているショッピングモールだが、悠斗はいつもと違う違和感を感じ始めた。

違和感の正体がわからないままいろいろと店を歩いてるうちに、いつもと違うあることに気付いた。

すれ違う人からの視線を感じるということである。

もちろん向けられているのは悠斗本人ではなくてその隣にいるマナの方である。

違和感の正体はまさにこれだった。

やはり悠斗の好みということだけではなく、マナは単純に相当可愛いらしい。

どうせみんな男の俺が釣り合っていないもったいないなど思っているのだからと考えていると、前から背が高く男の悠斗から見ても力っこいと思えるような男と、まあごく普通の女性のカップルが手を繋いで歩いてくるのが見えた。

女性のほうが明らかに釣り合っていないなと一瞬思ったが、よく考えると自分もそう思われているんだなと他人を見て改めて認識したのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0518q/>

死神の契約

2011年1月12日23時19分発行